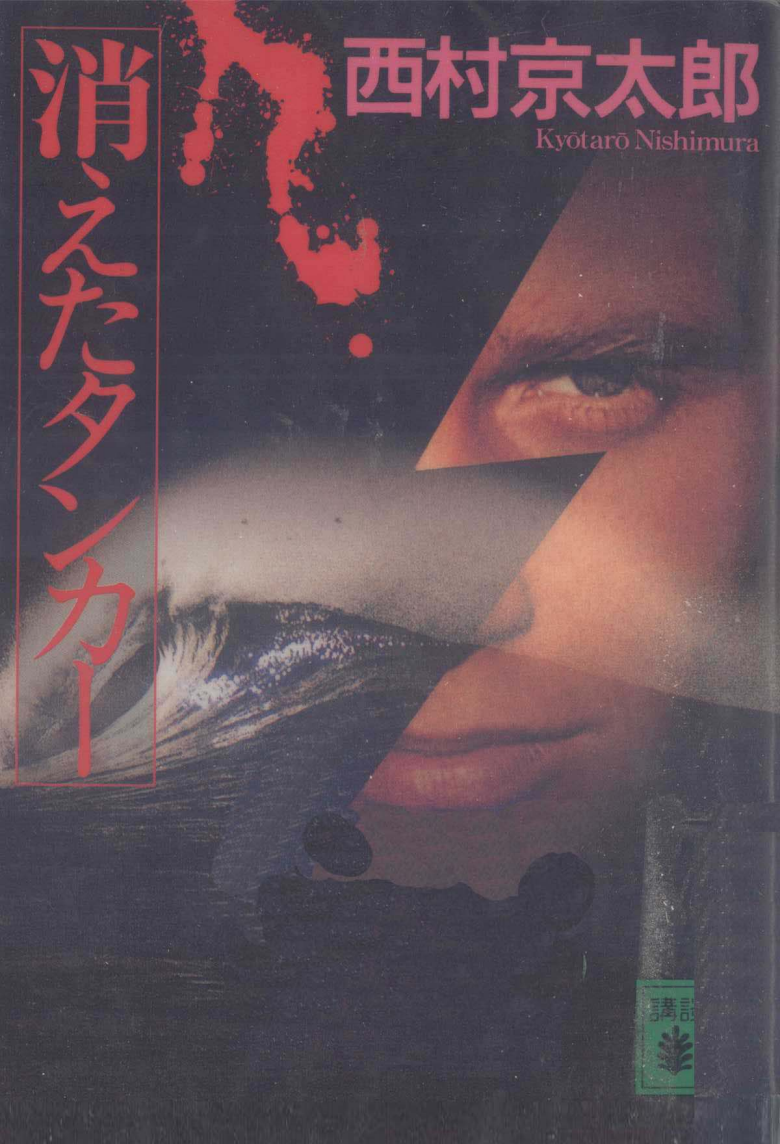
消えたタンカー

西村京太郎

Kyōtarō Nishimura



消えたタンカー
西村京太郎
© Kyotaro Nishimura 1999

1999年2月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——凸版印刷株式会社
製本——株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-263983-1

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

消えたタンカー

西村京太郎

講談社

消えたタンカー・目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

第一章　燃えるインド洋……9
第二章　六人の生存者……28
第三章　第一の犠牲者……47
第四章　大井川鉄橋……83
第五章　非常線……119
第六章　日本人町（リトル・トウキョウ）……158
第七章　南の島……179
第八章　沖縄の攻防……218

第九章　雪の中の結末……265
第十章　新しい疑惑……293
第十一章　タンカー事故……301
第十二章　消えたタンカー……344
第十三章　幻の敵を求めて……360
第十四章　暗闇（くらやみ）の中の男……393
解説・香山二三郎……424

消えたタンカー

第一章　燃えるインド洋

1

十二月五日。午後五時三十分。

北インド洋は、まだ日没に遠く、亜熱帯の強い太陽がコバルトブルーの海に降り注いでいる。

白川水産所属の遠洋トロール漁船「第五白川丸」四五〇トンは、アフリカ沖でのカツオ漁をおえ、インド大陸の南約一千キロの沖合を、日本に向けて帰途についていた。

ところどころに赤さびの見える船体が、九ヵ月にわたる遠洋漁業の辛さを物語っていたが、乗組員たちは、久しぶりに日本の土が踏めることで、子供のようにはしゃいでいた。

インド洋は、日本近海とは逆に、夏は荒れやすいが、冬季はモンスーンもなく、凪いだ日が多い。

この日も、風速二・五メートルの微風。二百メートルから三百メートルという大きな、長

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

い波が、ゆったりと船をゆするだけである。
赤道に近く、暑い。
(故郷の焼津は、今ごろ夜の十時くらいだな)
と、船長の鈴木晋吉が、海図机を見て呟いたとき、
「前方に火災！」
と、見張員が怒鳴った。
船長は、双眼鏡を眼に当てた。確かに、前方の海面に黒煙があがっている。チラチラと赤い炎が舌を出している。船長は、とっさに船火事と判断した。
「前進全速！」
船長は、操舵手に向かって、大声で命令した。四五〇トンの船体は、大きく見ぶるいしてから、エンジンの唸り声を立ててスピードをあげた。が、カツオを腹いっぱいに詰め込んだ船体は、せいぜい十一ノットの速力しか出ない。
「通信長。ＳＯＳを受信したか？」
鈴木船長は、双眼鏡を眼に当てたまま、大声できいた。
「今まで受信していません。ラジオブイの発信もなし」
「おかしいな。あれは、どう見ても船火事だぞ」
船火事なら、当然ＳＯＳを発信しているはずなのに、受信しなかったというのは解せな

い。

熱帯の落日は、唐突にやってくる。西の水平線に、真紅の太陽が沈みはじめると、周囲の海面は、コバルトブルーから赤に、そして暗紫色に変わっていく。それにつれて、今まで黒煙の中に、小さく顔をのぞかせていた赤い炎が、急に鮮明に輝きだした。

約千メートルまで近づいたとき、鈴木船長は、思わず、「海が燃えている」と呟いた。眼の前の光景は、海が燃えているとしか形容ができなかったからである。

直径約千メートルに近い、やや楕円形の海面が猛烈な勢いで、炎を吹きあげているのだ。黒煙は数百メートルの高さまで立ちのぼり、微風にのって西南に流れ、その巨大なカサが第五白川丸の頭上を蔽った。黒煙のために太陽がさえぎられ、周囲は夕闇が立ちこめたように薄暗くなった。

千メートル離れていても、「ごう、ごう」という炎を吹きあげる凄まじい音が聞こえてくる。これ以上近づくのは危険と感じて、船長は、停船を命じた。

船長はブリッジを出て、甲板上通路を渡り、船首甲板に出てみた。ほかの船員も、みんな、甲板にあがってきた。

巨大な火の柱だ。

第五白川丸の船体も、甲板に集まった船員たちの陽焼けした顔も、炎の照り返しを受けて真っ赤に染まっている。どの顔も堅くこわばっていた。

そして、猛烈に熱い。
「どうやら、石油ですな」
と、五十七歳の漁労長がいった。
「すると、タンカー火災か」
鈴木船長は、食い入るように、炎を吹きあげている海面を見つめた。
「たぶん、流出した原油が燃え出したんでしょう。船があの炎の中だとすると、まず助かりませんね」
「とにかく、海面を探して、生存者が見つかり次第、救助するんだッ」
鈴木船長は、潮がれした声で怒鳴り、双眼鏡を眼に当てた。
その瞬間、双眼鏡の視野の中に、影絵のような船体を見えた。船体といっても、船首の一部分である。巨大な船首が、炎の中で宙に持ちあがり、あっという間に、波間に消えてしまった。
「見たかね？」
船長は、前方を見つめたまま呟いた。
「見ました」
と、漁労長も、かすれた声でいい、つばを呑み込んだ。海に生きる男にとって、船が沈むのを見るほど辛いことはない。

黒い影絵のように沈んでいったので、船名もわからなかったし、どこの船かもわからない。あとは、相変わらず、吹きあげる火柱と、黒煙の渦が周囲を圧している。

太陽は、すでに沈んでしまった。頭上は暗黒なのに、海面付近は、炎上する石油の火で、真昼のように明るい。

「右前方に浮遊物！」

突然、船員の一人が叫んだ。

船名を書いた浮き輪だった。船員が、長いカギ竿を持って走る。甲板に引きあげられた白い浮き輪には、どす黒い油がべったりとこびりついている。雑巾で、油を拭きとると、「第一日本丸」の文字が現われた。

「通信長！」

と、鈴木船長は、ブリッジをふり返って、大声で怒鳴った。

「すぐ、東京へ打電してくれ」

「東京の本社ですか？」

「いや。海上保安庁だ」

「何と打ちます？」

「今、電文を書く」

船長は、手帳を取り出して殴り書きすると、そのページを引きちぎって、通信長に手渡し

た。

コチラハ、遠洋トロール漁船「第五白川丸」。インド南端ヨリ約一千キロ、南緯三度〇分、東経七四度三分ノ海面デ、直径約千メートルニワタッテ、石油(オイル)ガ燃エアガッテイルノヲ発見ス。

マルデ、インド洋全体ガ燃エテイル感ジデ、黒煙ハ、数百メートルノ上空マデ立チノボッテイル。

タンカーガ沈没シ、流出シタ重油ニ引火シタモノト思ワレル。目下ノトコロ生存者ハ発見デキズ、重油ニ汚レタ浮キ輪ヲ見ツケタガ、ソレニハ「第一日本丸」ノ文字ガアッタ。

今後、イカガスベキカ指示ヲ乞ウ。

海上保安庁からの返電は次のとおりだった。

貴船ハ現在位置ニトドマリ、極力、生存者ノ発見ニ努力サレタイ。

「第一日本丸」ハ、ニュージャパンライン所属ノ、マンモスタンカーデ、五〇万重量トン。サウジアラビアノカフジ基地デ原油ノ供給ヲ受ケ、日本ニ向ケ帰投中デ、本日(十二月五日)ノ午後七時(日本時間)、本社ト無線連絡中、突然、交信ガ途絶エタモノデアル。

「日本時間の午後七時というと、この辺りでは、午後三時だな」
鈴木船長は、無電係の持ってきたメモを見ながら呟いた。
黒煙を発見したのが、午後五時三十分だから、時間的には符合している。おそらく、その無線電話が切れた瞬間、何らかの事故に見舞われて沈没し、積んでいた原油が海面に流出したのだ。そして、引火、爆発し、燃えあがったに違いない。
鈴木船長は、「了解」の返電を海上保安庁に打った。
五〇万トンのマンモスタンカーと聞いて、船員たちは興奮した。この船の、実に千倍の大きさだ。積んでいた油がもったいないという者もいた。海洋汚染の問題もある。
そのうち、強烈な輻射熱のため、第五白川丸の甲板まで、次第に熱くなってきた。鉄板が焼け、触れると飛びあがるほど熱くなっている。たまらず、船長は、
「船を二百メートル後退させろ！」
と、命令した。
再びエンジンがかかり、第五白川丸は、ゆっくり二百メートル後退した。が、それでもなお、甲板に立っていると、肌が火傷するような輻射熱の激しさだった。
鈴木船長は、やむなく、さらに三百メートル船を後退させた。
海面は、いぜんとして燃え続けている。黒煙は上空で広がり、星をかくしてしまってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton